

極東國際軍事裁判所

亞米利加合衆國 其他

對

荒木 貞夫 其他

宣誓供述書

供述者 河邊虎四郎

自分儀我國ニ行ハルル方式ニ從ヒ先ヅ別紙ノ通り宣誓ヲ爲シタル上次ノ如ク供述致シマス

供述書

一、私、河邊虎四郎ハ昭和四年（一九二九年）四月ヨリ昭和七年（一九三二年）一月マデ、東京參謀本部第二課（作戰）ニ首席課員トシテ勤務シテ居リマシタ。

辯護側文書第二〇四八號A—Pト稱スル一連ノ電報寫ノ中B、D、F、L、M、Nハ私ノ課（大部ハ私自身）ニ於テ起草シ參謀總長又ハ參謀次長ノ名ノ下ニ關東軍司令官又ハ同軍參謀長ニ宛テ、打電シタモノニ相違ナイコトヲ確認致シマス。

又、電報寫Eハ關東軍ヨリ參謀本部カ受ケ取ツタモノデ、私E其ノ當時閱覽シタ記憶ガアリマス。

而シテ又、C、G、H、I、J、Kハ陸軍省ヨリ關東軍ニ打電セラレタモノデ、參謀本部ノ所管事項デハアリマセンガ、省部事務ノ連繫上、當時ソ

レ等ノ電報ガ發セラレタコトヲ私ハ聞キ知ツテ居リマシタ。

一 私ハ昭和九年（一九三四年）八月ヨリ昭和十一年（一九三六年）三月マデ關東軍參謀トシテ勤務シ、其ノ期間中昭和十年（一九三五年）八月以降ハ第二課（情報）長デアリマシタ。

當時田中隆吉中佐ハ第二課附參謀トシテ私ノ部下デアリマシタ。

南大將ハ昭和九年（一九三四年）十二月關東軍司令官兼駐滿全權大使トシテ着任セラレマシタガ、其ノ着任後同大將ハ屢々關東軍將兵ニ訓示ヲ與ヘマシタ。ソレ等ノ訓示ノ中私自身ガ任務ノ分擔上起衆セシメラレタモノガ多數アリマス。

元ヨリ訓示ハ其ノ都度特別ノ目的ヲ以テ示サレタノデアリマスガ、何レノ訓示ニヒ一貫シテ示サレマシタ趣旨ハ(1)、獨立滿洲國ノ尊重ト之ガ援助。

(2)、日本人ノ徒ラナル優越感ヲ自省甚除スベキコトノニツノ事項デアリマ

シタ。訓示ノ察文中ニ此ノ二ツノ事項ガ含まレテ居レバ第一軍司令官ノ蒲定ナル署名ヲ貰ヒ得タコトヲ私ハ記憶致シテ居リマス。

當時ノ軍司令官南大將ノ精神ガ叙上ノ點ニ在リマシタガ、滿洲國ガ完全ナ獨立國トシテ國際的地位ヲ確立スルコトハ大將ノ部下タル私等一同モ亦深ク念願シテ居タ所デアリマス。

三 當時ノ關東軍ハ日滿議定書ニ基キ滿洲國內ノ治安維持ヲ第一義トシ軍事専門的ニ見レバ、滿洲國外ヨリ起ル國防的危險ニ對シ不適當ナルコトヲモ忍ンデ、軍隊ノ極度ノ分散配置ノ態勢ヲ採ツテ居リマシタカラ、蘇聯ヤ中國等ニ對シ攻勢ニ出ルト云フヨウナコトノタメニハ尙更ラ至極不適當ノ狀態ニ置カレテ居リマシタ。

昭和十年（一九三五年）五月頃滿洲ノ軍情ヲ實視スル爲メ林陸相ガ滿洲ニ來ラレ、又、偶々其頃北支方面ニ於テ所謂梅津何應欽協定ガ結バレタ等ノ

ゴトガアツタタメ、之等ヲ結び付ケテ色々ノ流言的報導カ外國新聞ニ掲載セラレマシタガ、遺憾乍ラ之等ノ報導ニハ事實無根ノ事柄ガ極メテ多イノデアリマス。

例ヘバ法廷證等二二〇六號Aニ於テ左ノ諸項ヲ指摘シ得マス。

(1) 北支問題ハ關東軍ニ於テ處理サルベキモノデアルト林陸相ガ奉天デ言明シタト云フ記事(ニューヨークタイムス、一九三五年六月六日)ハ關東軍ト北支軍ノ隸屬關係、兩軍夫々ノ任務等ニ鑑ミ、全クノ虚説デ林陸相ガ斯ル言明ヲナスコトハ絶對ニアリマセン。

(2) 南大將ハ關東軍ニ秘密指令ヲ發シ、支那進入ノ態勢ヲトツタト云フ記事(トリビューン、一九三五年六月九日)、サクラメント、トリビューン同月八日、オー克蘭ド、トリビューン同月九日)モ事實無根デアリマス。斯カル指令ハ中央統帥部ノ命無クシテハ絶對ニ發シ得ベキ性質ノモノデナ

ク、又、此ノ種指令ハ若シアリトセバ職務上私自身ガ必ズ與リ知ラナケレバナラヌコトデアリマス。

(イ) 關東軍ガ五千ノ兵ヲ奉天ヨリ山海關ヘ出動サセタト云フ記事ハニユーヨークタイムス一九三五年六月十三日ノモ事實無根デアリマス。當時ノ關東軍トシテ夫程ノ兵力ヲ一地ニ集結スルコトハ思ヒモ寄ラヌ状態デアリマシタ。

(ロ) 内蒙古ノ徳王ニ彼レノ首都ヲ百靈廟ヨリ北方百哩ノ地ニ移轉セヨトノ要求ヲ軍當局ガ提示シタトノ記事ハニユーヨークヘラルド、一九三五年六月二日ノモ事實無根デアリマス。

(ホ) 以上ノ外、關東軍ニ直接關係ノナイコトデモ私ノ日本軍一般ニ關スル經驗ト智識カラ見テ全ク思ヒモ寄ラヌ虚説ガ報ゼラレテ居ルコトニ氣附クノデアリマス。

以上外國報導ニ關シ申シ述べマシタガ、結論的ニ云ツテ私ガ關東軍參謀ヲ勤務致シテ居リマシタ期間内、關東軍ガ中國側ニ最後通牒ノ如キモノヲ發シ、又ハ之ニ類スル強壓ヲ加ヘタト云フ様ナ事實ハアリマセン。

四 田中隆吉氏ガ昨年七月八日此ノ法廷ニ於テナシマシタ證言中ニアリマス

ル事項「南大將ガ軍司令官在任中長城以南ノ非武装地帯ニ二團約ニケ旅團ノ兵力ヲ出動シタ」ト云フコトハ「法廷記録第一二一八頁及第二一九頁」事實デナイト云フコトヲ私ハ確言シマス。又、同氏ハ「察哈爾ハ騎兵ニケ大隊ヲ出動セシメタ」ト申シテ居リマスガ「法廷記録第一二一八頁」此ノ件モ私ニハ全然記憶ハアリマセン。私ハ其ノ當時關東軍ノ兵力配置ガ簡單ニ國境外察哈爾省内ニ騎兵ノ稍々有力ナル部隊ヲ派遣シ得ル状態デナカツタト云フ確信的ノ記憶ヲ申シ述べ得マス。

唯一ツ關東軍ノ小部隊ガ北支非武装地帯ニ進出シタ事實トシテ私ノ記憶ニ

アリマスコトハ、昭和十年（一九三五年）夏ノ初頃熱河國境附近ニ於テ頑強ナル匪賊ヲ討伐シテ居タ第七師團ノ一小部隊（乃至ニ中隊程度）ガ此ノ匪賊ニ追扨シテ非武装地帯ニ踏ミ込ミマシタガ、直ニ國境内ニ引キ上げタ其ノコトデアリマス。

五 尚ホ此ノ際私ハ關東軍ガ北支問題ニ對シテ不干涉ノ態度ヲ採ツテ居タコトニ就テ一例ヲ申シマス。

私ガ旁ニ課長ノ時代ノコトデアリマスガ、昭和十年（一九三五年）十一月頃、殷汝耕ノ使者トシテ二人ノ人物ガ關東軍司令部ニ來リ私ニ面會ヲ求メ冀東自治政權ノ設立ニ關シ關東軍首腦部ノ意圖ヲ聽知シタイカラ板垣參謀副長ニ面會ヲ幹旋シテクレトノ申ヲ出ガアリマシタ。

其ノ時私ハ彼等ニ對シ、言下ニ、斯クノ如キ中國自体ノ内部問題ニ就テ關東軍首腦部ガ彼レ是レ意圖ヲ持ツテ居ル筈ガナイコトヲ述べ板垣中將ニ彼

等ヲ紹介スルコトヲキツパリト断ハリマシタ。
彼レ等ハ早速歸途ニ就キマシタノデ、此ノ事ヲ其ノ後ニ於テ巨板垣中將ニ
報告スルコトナク今日ニ至ツテ居リマス。

昭和二十二年（一九四七年）九月十六日 於東京

供述者 河邊虎四郎 ㊟

右ハ當立會人ノ面前ニテ宣誓シ且ツ署名捺印シタルコトヲ證明シマス

同日於同所

立會人

吉田正男 ㊟

宣 誓 書

良心ニ從ヒ眞實ヲ述ベ何事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セザルコトヲ誓フ

署名捺印

河邊 虎 四 郎 印